

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目： 空間表現に関する日中対照研究  
—認知意味論の立場から—

氏 名： 鄭 若曦

本研究では、中国語と日本語の空間表現に見られる様々な共通点と相違点を手掛かりに、両言語の話者が空間移動事象に関連する様々な概念をどのように言語化し、カテゴリー化しているのかに関して、認知意味論的立場から考察を行った。

第1章では、まず認知意味論的立場から空間表現を研究することの重要性を指摘した上で、博論全体の構成を紹介した。第2章では、先行研究に基づき、移動事象を構成する意味要素（基本的な意味要素、付随的な意味要素）を紹介した上で、日本語と中国語がこれらの意味要素を言語化する際に、それぞれどのような言語手段を持ち合わせているかをまとめ上げた。特に、両言語が移動の「経路」と「場所」を表す際、それぞれどのような基本的特徴を持つかに関して重点的に紹介した。なお、この章は本研究のオリジナルの考察（第3章から第7章）に入る前の前提知識をおさえるための章であり、筆者自身の主張は基本的に入っていない。

第3章から第7章までが本研究の主な考察と主張であり、主に二つの考察視点から分析を行った。

一つ目の考察視点は、同一の言語形式が複数の意味を持つ場合、その背後にある意味拡張の原理を明らかにすること、更に言語間で意味拡張の範囲と方向に違いが見られた場合、その違いが何によるのかを明らかにすることである。この観点からの考察は、主に第3章と第4章で行った。

まず、第3章では、両言語で起点を導く“从”と「から」が中間経路を導く場合にも使える現象に注目し、起点と中間経路が認知的にどのように繋がっているのか、また“从”

の表し得る中間経路の範囲が「から」より広いのはなぜかに関して考察を行った。具体的には、中間経路が「領域間の境界」にあたる場合は起点としての性格も併せ持つという従来の説明の問題点を検討し、「領域間の境界説」は現代語の「から」の起点用法と中間経路用法の繋がりを説明できても、“从”の一部の中間経路用法と起点用法の繋がりに関しては説明力が足りない指摘し、“从”の全ての中間経路用法を説明するためには語源である「随行義」に遡る必要があると主張した。また、日本語の「から」も、通時的に遡れば、現代語の“从”が持つ全ての中間経路用法を持っていた時期があったが、一時期「より」に淘汰されたことに加え、競合する「を」格の影響により、現代語の「から」は大部分の中間経路用法を失ってしまったのだという歴史的変遷も指摘した。

次に、第4章では、両言語の使役移動構文（「太郎は学校から本を持ってきた」「太郎从学校拿回了一本书」）が取得事象を表す場合にも使える（「太郎は花子から本を借りた」「太郎从花子那儿借了一本书」）という現象に注目し、使役移動構文から取得構文への拡張原理は何か、また「から」取得構文は“从”取得構文より拡張範囲が広い（＝“从”取得構文は他動性の高い取得動詞しか許容できず、取得対象が抽象物の場合は具体性・個性性の高いものしか許容できない）のはなぜかに関して考察を行った。具体的には、まず日本語が「太郎は花子から本を受け取った」のように他動性の低い取得動詞をも述語動詞として許容できたのは、取得事象は使役移動事象と違って、与え手（＝花子）も取得対象の移動を引き起こせる行為者としての側面を持っており、よって受け手（＝太郎）は必ずしも取得対象の移動の直接的な引き起こし手でなくてもよく、単に移動を許容する立場にあるだけでもよいと述べた。このような拡張を「強制使役から許容使役への拡張」と特徴づけた。また、日本語が「太郎は花子から名義を借りた」「太郎は花子から批判を受けた」のように取得対象が具体性・個性性の低い抽象物の場合も許容できたのは、「物理的移動」から「所有権の変化」「知識情報・思考感情・態度評価の伝達」「行為エネルギーの伝達」へのメタファー的拡張が徹底しているためだと述べた。一方、中国語の“从”取得構文の意味拡張が抑制されているのは、敢えて取得対象の移動の引き起こし手でない受け手に視点を置く取得動詞が極めて少ないという事情に加え、与え手の場所化が常に必要であることから、“从+与え手”は依然として空間性が強いと説明を試みた。

二つ目の考察視点は、同一の意味要素を言語化する際、両言語はそれぞれどの言語成分（中核部と非中核部のどちら）で表現することを好むかである。Talmyの一連の研究では、

正にこのような観点から、移動を構成する最も重要な意味要素である「経路」が諸言語でどのように言語化されているかを考察している。本研究では、同様の観点から、第5章と第6章でそれぞれ「探索領域」（＝基準物を参照点とした移動物の可能な存在位置）と「場所の状態変化」（＝移動物によって全面覆われる、または内部を満たされること）が日本語と中国語でどのように言語化されているかを考察した。

まず、第5章では、「探索領域」が動詞述語によって言語化される場合に焦点を当て、中国語は“装+进（来/去）”“贴+上（来/去）”のように、「探索領域」に関する情報を非中核部にあたる方向補語の“进（来/去）”“上（来/去）”で表現するタイプの言語であるのに対して、日本語は「詰める」「貼る」といった中核部に立つ動詞自身で表現するタイプの言語だとわかった。上記のことから、両言語で中核部に立つ“装”“貼”や「詰める」「貼る」のような「設置動詞」は、実は「探索領域」を指定しているか否かという点で対照的であることがわかった。更に、上記の両言語の「設置動詞」の意味の違いを考慮することで、“贴在本子上”“ノートに貼る”“装在行李箱里”“スーツケースに詰める”に見られた両言語の相対名詞“里”“上”と「(の)中」「(の)上」の有無の違いも自然に説明ができると主張した。

次に、第6章では、「場所格交替」を手掛かりに、日本語は「塗る」のように、移動物の位置変化も場所の状態変化も中核部に立つ動詞で表現する傾向が強いのに対して、中国語は“涂+上”“涂+満”のように、移動物の位置変化も場所の状態変化も非中核部にあたる結果補語の“上”“満”で表現するタイプの言語であることがわかった。また、日本語が「被せる」「覆う」のように、移動物の位置変化と場所の状態変化のどちらか一方しか表せない動詞が多いのに対して、中国語の「他動詞+結果補語」からなる組み合わせ（“蒙+上”）は、より柔軟に場所格交替に参加できることも観察できた。そのような認識の柔軟性は、動詞述語（主に結果補語）の図地未指定性や、「行為+結果」で事態を分析的に語る中国語の「意合性」の強さと関係が深いということも指摘した。

最後に第7章では、全体のまとめと今後の課題について論じた。